

大学生の幼少期における絵本体験の記憶

松島 暢志*¹・戸高 麻綾*²

1. 問題と目的

「絵本」というものに全く接することなく、子ども時代を過ごしてきた人はいないだろう。絵本は子どもの生活の奥深くまで根付いている。家庭や集団保育の場面で、絵本は当たり前のようにそこに存在し、そして読まれている。それほどまでに絵本が子どもの世界（だけでなくわれわれ大人の世界も含めて）に浸透しているのは、絵本を読むという行為が子どもにとって楽しいことであるだけでなく、絵本が何らかの影響を子どもの発達やその後の人生に与えるからであろう。

まず、絵本とは何かについて定義していきたい。絵本は子どもが最も早くに接する言語環境のひとつである。大人が言語的思考の未熟な子どものために、絵という形象的な手段を用いて子どもの中に認識できる世界を広げることを意図したとしたもの¹⁾であり、一定の時間的秩序（物語性）を持ち、それを子どもの意思で自由に操作できるもの²⁾であるなどの点で、テレビなど他のさまざまな言語環境とは趣を異にすると考えられる。

次に絵本の心理学的意義に目を移すと、心理学の分野では、子どもの言語発達との関連が広く研究されてきた。その中で、絵本読み場面での母子相互交渉に着目し、母親の言語入力と子どもの初期言語習得との関係を研究したものがある。Ninio & Bruner は絵本を媒介とした母親と子どものやりとりの中に、『注意喚起→発問→ラベリング→フィードバック』といったルーティン化されたフォーマットが形成されていることを見出した³⁾。また、このフォーマットの内容は母親と子どものそれぞれの要因の組み合わせによって、個人差が生じるということも報告されている⁴⁾。フォーマットを用いることで、大人は言語能力の未熟な子どもの注意をコントロールし、子どもに会話の展開を予測しやすくする。また読み書き能力の発達に関しては、絵本という、現実とは距離をおいた、抽象的な状況に基づいて発せられた言語を、子どものメタ認知的発達と関連させて研究したもの⁵⁾などもある。

言語発達との関連の他にも、今井・廖・中村は、以下のように絵本のもつ意義をまとめた⁶⁾。第一に、現実と接することができる以上に豊富な世界を持つ絵本と接することで、子どもは想像力、知的好奇心、共感性などを刺激され、これらの能力が育まれることとなる。第二に、言語読解能力の未熟な子どもと絵本とのふれあいには、読み手としての大人が介在する場合が多く、読み聞かせなどで大人と子どもが生き生きとした絵本体験を共有することで、両者の間に親密なつながりを得ることもできる。このように絵本は子どものための文化財として、様々な影響を子どもの発達やその後の人生に与えていると言える。

では、このような絵本からもたらされる影響は、一般的に顕在的に意識されているのだろうか。藤井・山崎・郷木は、保育者志望の学生を対象に2003年と2008年の2区間での横断調査により、子どもの時期の絵本の記憶に関して質問紙を用いて尋ねた⁷⁾。その結果、子どもの時期に絵本に親しんだ割合は増

*1 幼児教育科

*2 社会福祉法人さくら福祉会 丸石こどもの家

加した。しかし、絵本そのものの記憶は増加した一方で、読み聞かせてくれた他者との関わりは減少していた。また佐野は、幼少期の絵本の体験が学生の保育者志望動機に影響しているかを検討した⁸⁾。結果は、保育者志望の学生は絵本に対する意識や現在の読書への嗜好があり、幼少期の絵本が記憶に残る理由は、絵本のコンテンツ、大人に読んでもらった経験、繰り返し読んだ経験という3つが大きいということが明らかになった。

しかし彼女らの研究は、度数分布による単純な割合の比較に留まり統計的な検討がなされていない、また対照群が設定されていない等の問題がまだ残されており、十分に検証されたものとは言い難い。従って本研究では、このような先行研究での問題点を解決しながら、青年の顕在的な絵本に対する記憶について検証することを目的とする。また、保育者志望の大学生とそれ以外の大学生を比較することで、この顕在的な絵本の記憶が、将来のキャリア選択に影響しているのかも併せて検討する。

2. 方法

大学生及び短期大学生を対象に質問紙調査を行った。実施した大学、短期大学には、それぞれ一つずつ保育者・教員養成課程の学科があり、それらを「保育者養成課程」とまとめ、それ以外の専攻の学生を「その他」とした。

対象者：

大学生・短期大学生 231 名 (Range: 18-25 才 Average: 18.9 才 女性 141 名, 男性 90 名)。保育者・教員養成課程所属は 79 名, その他の学科所属は 152 名であった。

質問紙の構成：

所属学科、年齢などの個人属性を尋ねる項目の他に、絵本を読み聞かせてもらった経験や、記憶に残っている本についての質問を中心に、全 11 項目用意した。これらの項目には、記憶に残っている絵本の有無、その中で何が記憶に残っているか (内容、絵・写真、読んだ行為自体)、その記憶はどんな感情価を持つか (楽しい、面白い、悲しい、怖い)、自分が大人になった時絵本の読み聞かせをしたいかなどを含んでいた。記憶内容と感情価については 5 件法で評定させた (詳しい質問項目は付表参照)。

手続き：

大学、短期大学で行う通常講義の冒頭の時間を使って、受講者に質問紙を配布し、回答を求め、回収するという集団法で実施した。有効回答率は 100% であった。

調査時期：

2018 年 11 月。

3. 結果

専攻別にみる記憶に残っている絵本の有無

記憶に残っている絵本を回答した人数は全被験者 231 名中 159 名 (68.8%) だった。保育者養成課程かそれ以外の課程かを専攻別に、記憶に残っている絵本の有無について、人数を比較した。2×2 のカイ二乗検定の結果、分布に有意な偏りが見られ ($\chi^2(1) = 4.57, p < .05$)、保育者養成課程の学生の方が、記憶に残っている絵本が「ある」と回答する人数が多かった (ある: 60/79 人, 75.9%)。その一方で、その他の専攻の学生の方が、記憶に残っている絵本が「ない」と回答する人数が有意に多かった (な

い：63/152人，41.4%)。

記憶に残っている本の題名

自由回答で求めた記憶に残っている絵本の題名は77種類，そのうち複数回答のあった絵本は20種類であった (Table 1 参照)。これによると，最も記憶に残っている絵本の上位3つは順に，「ぐりとぐら」シリーズ (著者：中川李枝子・大村百合子)，「はらぺこあおむし」 (著者・訳者：エリック・カール・もりひさし)，「バムとケロ」シリーズ (著者：島田ゆか) であった。

Table 1. 記憶に残っている絵本の題名 (複数回答があったもの)

題名	著者・訳者	回答者数 (人)
「ぐりとぐら」シリーズ	中川李枝子・大村百合子	33
「はらぺこあおむし」	エリック・カール・もりひさし	17
「バムとケロ」シリーズ	島田ゆか	8
「こんとあき」	林明子	6
「ノンタン」シリーズ	キヨノサチコ	6
「100万回生きたねこ」	佐野洋子	4
「おいしいのぼうけん」	ふるたたるひ・たばたせいいち	4
「しろくまちゃんのほっとけーき」	わかやまけん	4
「どうぞのいす」	香山美子・柿本幸造	4
「おまえうまそうだな」	宮西達也	3
「カラスのパンやさん」	かこさとし	3
「さんびきのやぎのがらがらどん」	ノルウェーの昔話 マーシャ・ブラウン・瀬田貞二	3
「はじめてのおつかい」	林明子	3
「いないいないばあ」	松谷みよ子・瀬川康男	2
「かいじゅうたちのいるところ」	モーリス・センダック・じんぐうてるお	2
「くれよんのくろくん」	なかやみわ	2
「三びきのこぶた」	イギリスの昔話 山田三郎・瀬田貞二	2
「じごくのそうべえ」	たじまゆきひこ	2
「ねないこだれだ」	せなけいこ	2
「めっきらもっきらどおんどん」	長谷川摂子・ふりやなな	2

読み聞かせてもらった経験

すべての対象者について，子どものころ絵本を読み聞かせてもらった程度について質問した。1 要因分散分析をしたところ，専攻学科の主効果が有意であった ($F = 6.27, p = .013$)。保育者養成専攻の学生の方が，絵本を読み聞かせてもらった程度が大きいことが明らかになった。

自分で絵本を読んだ経験

すべての対象者について，子どものころ自分で絵本を読んだ程度について質問した。1 要因分散分析をしたところ，専攻学科の主効果は有意ではなく ($F = 0.03, p = .86$)。保育者養成専攻とその他の専

攻の学生に差は見られなかった。

大人になった際に読み聞かせをしたいかどうか

すべての対象者において、自分が大人になった際に読み聞かせをしたいかどうかについて、その程度を質問した。1 要因分散分析をしたところ、専攻学科の主効果が有意であった ($F = 23.45, p < .001$)。保育者養成専攻の学生の方が、自分が大人になった際に絵本の読み聞かせをしたい程度が大きいことが明らかになった。

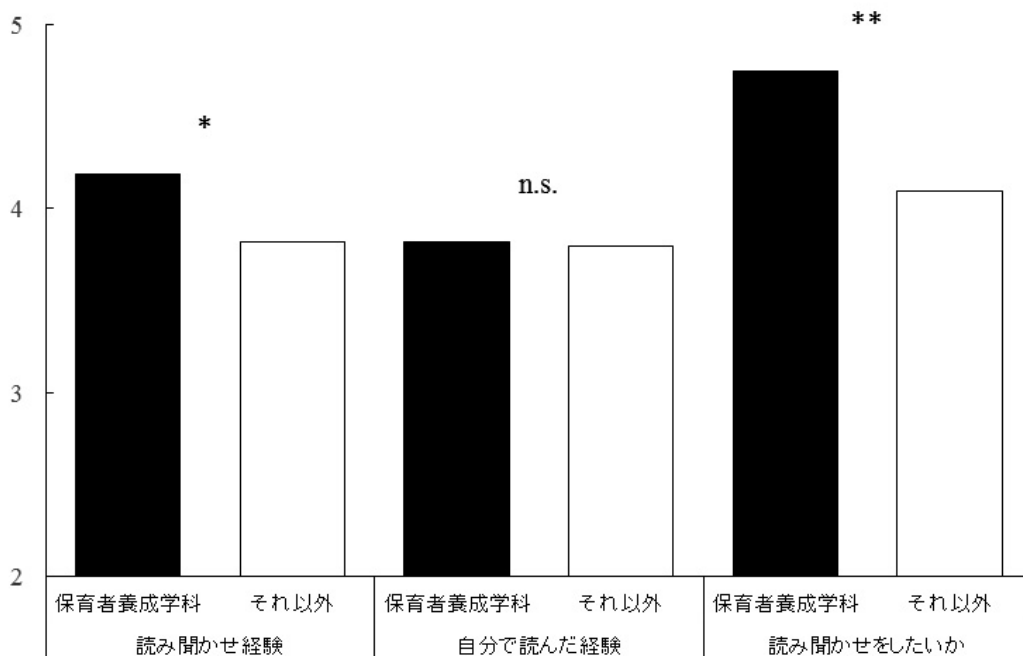


Figure 1. 専攻別に見る絵本経験と読み聞かせへの態度 (* $p < .05$, ** $p < .001$)

現在の読書習慣

すべての対象者において、現在の読書習慣について質問し、その程度を5点満点で得点化した。1 要因分散分析をしたところ、専攻学科の主効果が有意であった ($F = 5.25, p = .023$)。保育者養成専攻の学生よりも、その他の専攻の学生の方が、現在の読書習慣は多いと回答した。

絵本の何が記憶に残っているか

絵本の記憶が「ある」と回答した対象者に対して、絵本のどの要素が記憶に残っているかについて質問した。内容、絵・写真、読んでもらった経験自体に分けて、評定値を2 要因分散分析したところ、専攻学科の主効果が有意傾向 ($F = 3.76, p = .054$)、記憶の種類の主効果が有意であった ($F = 33.05, p < .001$)。交互作用は有意ではなかった。ライアン法による多重比較の結果、絵・写真を記憶している学生が最も多く、次いで内容、そして読んでもらった経験の順で、記憶していることが明らかになった (Figure 2. 参照)。

記憶はどんな感情として残っているか

絵本の記憶が「ある」と回答した対象者に対して、その記憶はどんな感情であるかを質問した。楽しい、怖い、悲しい、面白い、それぞれの評定値を2要因分散分析したところ、記憶の感情価の主効果が有意で ($F = 183.61, p < .001$)、専攻学科の主効果、交互作用はともに有意ではなかった。ライアン法による多重比較の結果、絵本についての記憶は、楽しい、面白いというポジティブな感情の方が、怖い、悲しいというネガティブな感情よりも、強く残っているということが明らかになった (Figure 3. 参照)。

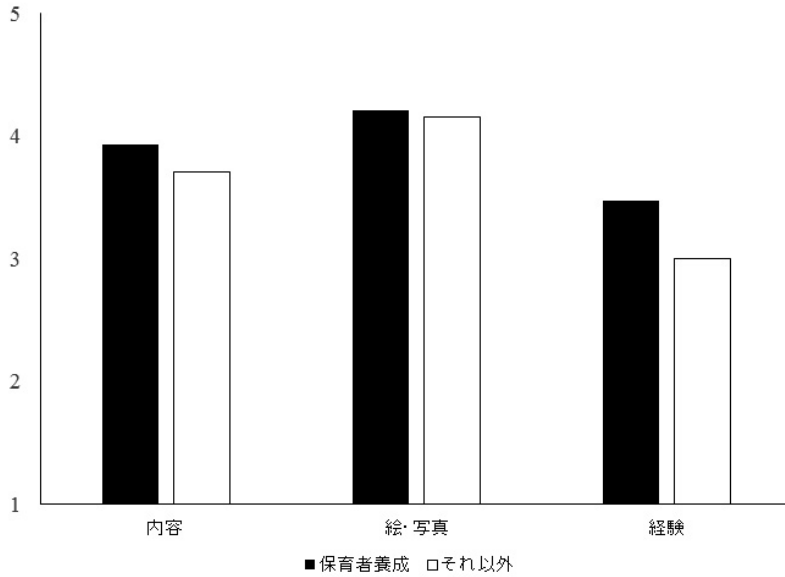


Figure 2. 専攻別に見る記憶の種類

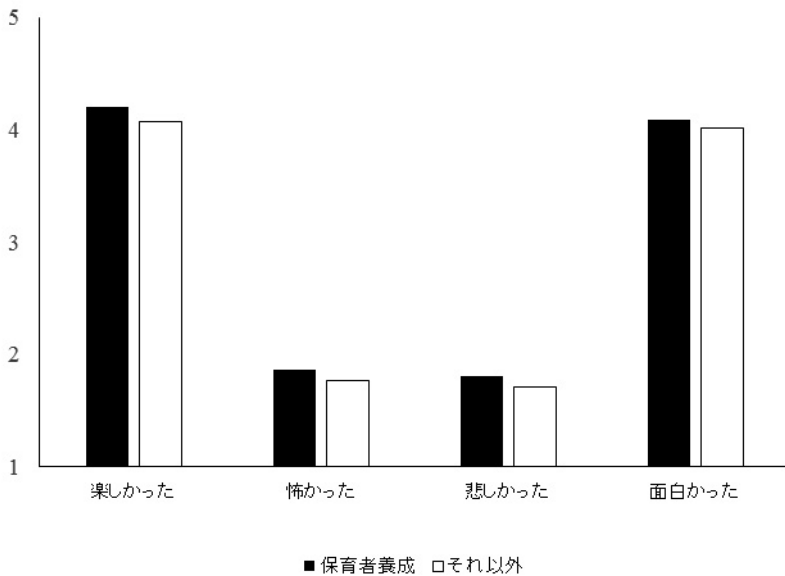


Figure 3. 専攻科別に見る記憶の感情価

4. 考察

顕在的記憶として残っている絵本について

本研究では、大学生・短大生において約7割が、幼少期に接した絵本を覚えていると回答した。記憶に残っている本の題名を考えると、古くは約50年前に出版されたものも含まれており、毎年多くの絵本が出版されている中で、良い絵本は世代を越えて読み継がれていくものであることが改めて示されたといえよう。題名として挙げた人数が多かった「ぐりとぐら」シリーズや、「はらぺこあおむし」などは、先行研究^{7) 8)}の結果と同様の傾向を示しており、本研究もこの世代がどのような絵本を読んで（または読んでもらって）育ってきたかに関する一つの資料として有用であると考えられる。

絵本経験と読み聞かせへの態度

次に、保育者養成課程専攻か、それ以外かで、幼少期の絵本経験に差があるのかを検証した。結果としては、保育者養成専攻の学生の方が、大人から読み聞かせてもらった経験を多く記憶していること、一方で、自分で絵本を読んだ経験に関しては専攻による差はないことが明らかになった。回顧法による回答のため、実際に保育者養成専攻の学生の方が多く読み聞かせをされていた、という結論を出すには早計であるが、記憶に残りやすかったということは繰り返しそのような経験をしたとも考えられる。

ただし、幼少期の絵本経験が必ずしも現在の読書習慣に直結するわけではないことも明らかになった。マンガを含むとはいえ、保育者養成課程専攻ではない学生の方が現時点では読書をする習慣があることが、現在の読書習慣のデータから読み取れた。読み聞かせの体験は保育者養成専攻の学生の方が多く、と考え合わせると、絵本の読み聞かせという受動的な経験が、自ら読書をするという能動的な行動を必ずしも惹起することはないとも解釈できる。この点に関しては、「未就学児の頃から、小学校低学年、中・高学年へと学年が上がるにつれて読み聞かせの割合は減ってくるが、高学年まで読み聞かせをしていた子供ほど、本を読んでいない子供の割合が少ない」とした文部科学省の調査⁹⁾に合致しない結果になっている。これには質問の仕方、サンプルサイズの違いや偏りなどの要因が影響したとも考えられ、今後さらに検証していく必要がある。

一方で、将来読み聞かせをしたいかという意識に関しては、保育者養成課程専攻の学生の方が高いことも明らかになった。もちろん、職務内で子どもに読み聞かせをする保育者という仕事を意識しての回答の可能性が高いが、それだけ将来のキャリアを見据えて学生生活を送っているとも言える。保育者養成専攻の学生が、自身の幼少期の記憶にある絵本の読み聞かせという文化を、次の世代に継承していくとする態度が見られる。

絵本の記憶内容とその感情価

それでは、絵本についての顕在的記憶をもつ人は、絵本のどのような要素について覚えているのだろうか。それについての分析の結果として、本研究の対象者は絵本を構成する「視覚刺激」(絵・写真・仕掛けなど)に対する記憶を最も持っていることが明らかになった。絵本は文字通り、「絵」の本である。もちろん絵とともに文字としての言葉も併記されるが、文字のない絵本はあっても、絵のない絵本は無い。その意味では、絵という、絵本におけるもっとも重要な要素についての記憶が残っているというのも当然であるとも考えられる。絵本の絵に関しては、1920年代以降のアメリカから、ダイナミックで

躍動的な表現をもつようになり、デザインとしても印象に残りやすいように構成されるようになったため¹⁰⁾、幼児であっても視覚的に記憶されやすいものとなったのであろう。視覚刺激に次いで記憶されたと回答されたのが「絵本の内容」であり、今回の調査で最も回答が少なかったのは「誰かに読んでもらったという経験」であった。この結果は、2003年から2008年にかけて、読み聞かせてくれた他者との関わりは減少し、絵本そのものの記憶が増加したという先行研究⁷⁾の結果にも幾分つながるものである。これには、読み聞かせの体験が両親と共有されるものから、保育園・幼稚園・小学校の先生にしてもらうものに次第に移行している傾向⁷⁾を反映しているのかもしれない。

続いて、絵本の記憶がどのような感情価を持つものかを分析した。結果は、「楽しかった」、「面白かった」というポジティブな感情が、「怖かった」、「悲しかった」というネガティブな感情よりも多く記憶されていることが明らかになった。自由記述で挙げられた題名を概観すると、必ずしもポジティブな感情を喚起するような内容の絵本ばかりではないにもかかわらず（例：「100万回生きたねこ」、「ねないこだれだ」）、ポジティブな感情を多く覚えているということは、絵本の内容だけでなく、絵本に関する体験自体へ肯定的な意識を持っていることを反映しているとも考えられる。幼児期に絵本の読み聞かせ経験のある98%の人々が絵本の読み聞かせには良い思い出を持ち、肯定的な効果があると考えていることが、先行研究¹¹⁾でも示唆されている。本研究は別のデータからこの示唆を裏付けるものである。冒頭にも書いたように、絵本は言語発達や読み書き能力の発達に大きく影響を与えるものと、これまで考えられてきた。しかし、絵本の読み聞かせはそのような学習効果だけに留まるものではなく、聞き手の感性面、情緒面にも影響を与えるとも言えよう。先述したように、読み聞かせの主体が家庭から、保育・教育現場に移行しつつあるということを踏まえるなら、例えば、大好きな先生が行う読み聞かせのポジティブな経験が、子どもにとって自分も将来保育者になりたいというキャリア選択に繋がることも十分に考えられる。

本研究では、幼少期の絵本体験の重要性に焦点を当ててきたが、当然ながら絵本との接点は幼少期に限られたものでもない¹²⁾。絵本は大人でも楽しめるものである。今後は、大人になってからの絵本体験が、どのような影響を与えるのかについても、検討していく必要があると思われる。

5. 引用文献

- 1) 佐々木宏子. 絵本 - 児童心理学からの研究視点を探る - 日本児童研究所 (編). 児童心理学の進歩 1980年度版. 金子書房. 1980年
- 2) 山口茂嘉・高橋敏之・小坂圭子. 幼児期における言語環境としての絵本に関する一考察. *岡山大学教育学部研究集録* 97, 41-46. 1994年
- 3) Ninio, A., & Bruner, J.S. The achievement and antecedents of labeling. *Journal of Child Language*, 5, 1-15. 1978年
- 4) 石崎理恵. 絵本場面における母親と子どもの対話分析：フォーマットの獲得と個人差. *発達心理学研究* 7 (1), 1-11. 1996年
- 5) Sulzby, E. Children's emergent reading of favorite storybooks: A development study. *Reading Research Quarterly*, 20, 458-481. 1985年
- 6) 今井靖親・廖小慧・中村敏江. 日本と台湾における絵本の望ましい読み聞かせ方法に関する比較. *奈良教育大学紀要* 42 (1), 211-223. 1993年

- 7) 藤井伊津子・山崎早苗・郷木義子. 青年期からみた子ども期の絵本体験2 - 2003年と2008年を比較して-. *順正短期大学研究紀要* 第37号, 105-114. 2008年
- 8) 佐野友恵. 保育者志望学生の絵本体験に関する研究. *武庫川女子大学教育学研究論集* 13巻, 17-24. 2018年
- 9) 文部科学省. 平成30年度「子供の読書活動推進計画に関する調査研究」報告書. 2019年
- 10) 中川素子・今井良朗・笹本純. 絵本の視覚表現 - そのひろがりとはたらき -. 日本エディタースクール出版部. 2001年
- 11) 浜崎隆司・黒田みゆき. 絵本の読み聞かせがその後の人生に及ぼす影響 - テキストマイニング法を用いて -. *鳴門教育大学研究紀要*, 第32巻, 86-92. 2017年
- 12) 河合隼男・松居直・柳田邦男. 絵本の力. 岩波書店. 2001年

付記

本論文は、第二著者が比治山大学短期大学部幼児教育科に提出した卒業論文（2018年度）に、第一著者がデータを新たに再分析し、再考察した上で、加筆・修正したものである。

（受理 2019年10月31日）

大学生の幼少期における絵本体験の記憶

付表 使用した質問紙・質問項目

以下の文章を読んで、数字がある場合は当てはまる【数字】に○をつけてください。

1.	子どものころの「読み聞かせ」について				
①	絵本を読み聞かせをしてもらった経験	ない			多い
		1	2	3	4 5
②	絵本を自分で読んだ経験	ない			多い
		1	2	3	4 5
③	記憶に残っている絵本はありますか	ある			ない
④	③で「ある」に○を付けた場合は 具体的な書名を教えてください	〔 書 名 〕			
⑤	④はいつごろのことですか	() 歳ごろ			
⑥	④は誰に読み聞かせてもらいましたか または自分で読んだ経験ですか	1.自分 2.親 3.保育者 4.その他 ()			
⑦	④で答えた絵本について 何が印象に残っていますか 1 : まったく印象がない } 5 : とても印象に残っている	<ul style="list-style-type: none"> ・内容 1 2 3 4 5 ・絵, 写真, 仕掛け 1 2 3 4 5 ・読んでもらった経験 1 2 3 4 5 			
⑧	その記憶の内容について 1 : 当てはまらない } 5 : 当てはまる	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかった 1 2 3 4 5 ・怖かった 1 2 3 4 5 ・悲しかった 1 2 3 4 5 ・面白かった 1 2 3 4 5 			
⑨	現在, 絵本が好きですか	好き			嫌い
⑩	自分が親になって読み聞かせをしたいか	思わない			思う
		1	2	3	4 5
2.	現在, 本やマンガ(雑誌は除く)をどのくらい読みますか	少ない			多い
		1	2	3	4 5

大学生の幼少期における絵本体験の記憶

松島暢志・戸高麻綾

要旨

本研究は、大学生が幼少期の絵本に関する記憶を持っているのか、またそれが将来のキャリア選択に影響を与えるのかを検証することを目的とした。231名の大学生・短期大学生が質問紙に回答をした。保育者養成課程専攻の学生は、その他の学生よりも絵本や読み聞かせの体験をよく記憶していた。さらに、その記憶は絵や写真などの視覚刺激についてのものが多く、またポジティブな感情価をもつものであった。幼少期の絵本の読み聞かせが、保育者というキャリア選択に影響を与えている可能性が示唆された。

Abstract

A study on memory of childhood picture books.

MATSUSHIMA Nobushi and TODAKA Maaya

The purpose of the present study is to examine whether college students have memories of childhood picture books, and whether these memories influence their career selections. Two-hundred and thirty-two college and junior college students were participated in this study and answered questionnaire. As a result, child-minder candidates had more memories of childhood picture books and storytelling than the other students. Moreover, they remembered visual stimuli of picture book more than contents, and their memories had positive emotional values. The present study faintly suggests that storytelling of childhood picture books affects career selection as child-minder.

(Received October 31, 2019)